
恋する変態

栗栖

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋する変態

【Nコード】

N1859R

【作者名】

栗栖

【あらすじ】

深夜、パソコン画面に熱い視線を送っていると、桜の花びらが落ちてきた。次の瞬間、美鈴は虹色の光につつまれ気を失っていた。目覚めると、目の前には愛しのルシフェル様が！……えっ違う？ まあ、いいや。結婚してください。変態美少女と押しに弱い騎士の異世界召喚ラブストーリー！【お知らせ】しばらくお休みします。詳しくは活動報告を。

プロローグ（前書き）

初めて小説を書くので稚拙な文でお恥ずかしい限りですが、楽しんで頂ければ幸いです。

プロローグ

深夜、超高級住宅街の中でも群を抜く大邸宅の一室に——鈴の音のような声で——ぐふぐふと涎を垂らして笑う美少女がいた。

彼女の名前は別宮美鈴。^{べつみやみすず}都内の女子高に通う17歳で、誰もが称賛を送りたくなる才色兼備なお嬢様。

そんな美鈴にも人に言えない秘密があった。それは正真正銘の”隠れオタク”であること。

何故”隠れ”なのかというと、美鈴がオタクであることを周りが許さない環境だからである。

学校はお嬢様教育に忙しく、友達はたくさんいてもみんな美鈴に憧れを持ちすぎていて、親友になろうとは思わなかった。一度母にそれとなくほめかしたときは、部屋の空気が冷えた気がしたので最後まで言うことができなかった。一人娘の美鈴には完璧なお嬢様でいてくれることを望んでいるからだ。

それでも美鈴はブランド物のワンピースよりメイド服が着たくて、ついでに猫耳をつけたくて、ピンクの髪に憧れて、恋するのはお坊っチャマより騎士や王子様（あるいは宰相様だったり魔術師）だった。

だから美鈴は日中は完璧なお嬢様を演じ、本来の自分でいられるオタクとしての時間を楽しむのはいつも深夜だけと決めていた。

そして今夜もココア片手に、パソコンの画面に熱中していたのだ。

”愛しのルシフェル様に会ったために”

《ルシフェル・ウィースハーデン》（この人については美鈴さんが解説）

マイナー小説『桜の騎士』の主人公。癖つけの黒髪、紫の瞳、左目には眼帯、長身、鍛えられた身体。近寄りがたい雰囲気を持つ麗しき青年。

辛い過去を背負いながらも、日々、騎士として国のために鍛練に励む。

そして、私が夢中になっている彼の想い人なのよ！ きゃ~~~~~
~~~~~！（終）

今、熱い視線が送られている画面には剣を持ち汗をかきながら訓練をしているルシフェル様が映っている。

「あーん、ルシフェル様ったらなんて格好良いの！ 舐めたくなくなるじゃない！！」

美鈴が剣豪と称えられるルシフェル様ですら大切な剣を放って逃げ出したくなるような妄想に花を咲かせているとき、彼女の足元には金色の文字いくつもが浮かび上がっていた。

文字は数を増やしていき、円を描くと文字の色が濃くなる。

次の画像の移ろうとしたとき、美鈴の目の前に白っぽいものがひらひらと落ちてきた。

埃？とキャッチして見てみると、それは桜の花びらだった。

（えっなんで……）

——次の瞬間

風が吹き、美鈴は虹色の光に包まれた。

翌朝。

お手伝いさんが美鈴を起こしに来たとき、部屋は散乱し、床には

焼け焦げた文字のような跡が出来ていた。

そしてもちろん、美鈴はいなかった。

## プロローグ（後書き）

美鈴「なっなんなの！？ 何が起きたのよ！」

作者「まあまあ、美鈴ちゃん。落ち着いて、ね」

美鈴「明日は『桜の騎士』最終巻の発売日だっていうのに……」

「……！！！」

作者「……」

読んで頂きありがとうございました。

## 桜の精と騎士

「これで任務終了だ。ご苦勞だったな。レイス、お前は俺と一緒に大隊長に報告に行くぞ。」

「えー隊長だけで行ってくださいよ。親子水入らずの時間を楽しんでください」

「うるさい。他は解散だ」

辺境騎士団中隊長ウィース・ハーンズの声に副隊長のレイス・フオード以外は、宿舎や家族、恋人のもとへと帰って行った。

「行くぞ」

背後で「ホントに僕も行くんですかあ？」とやる気のない声で返事をしているレイスを無視して、執務室に向かった。

時間も時間なので、砦の中も昼間に比べると人が少ない。レイスはまだ後ろでぶつぶつ文句を言っている。うるさい奴だ。

広い砦の中を歩いてやっと執務室の前まで来ると、後ろから声をかけられる。振り向くとそこにいたのは母さんの侍女、フロンだった。レイスは美人なフロンを見ると急に笑顔になった。相変わらず現金な奴だ。

「ウィース様、旦那様からのご伝言です。」私は愛する愛らしいハニーに一刻も早く会いたいからも帰る。それと私だけのハニーが

桜のケーキを作りたいそうだ。採ってこい。あつ報告はその時でいいや”とのことです」

思わず眉間に皺を寄せ大きく溜息を吐いた。――まったく、ふざけている。

「わかった。……レイス、私は桜を採ってから行く。彼女を送ってくれ」

「先に行って報告しますよ。行きましよう、フロンさん」

二人を見送った後、自分も桜を採りに砦を出た。

この町に桜の木は一本しかない。ただ、一本しかないが大きく立派で、満開になるとその存在感は凄く、とても美しい。あと一週間もすれば見頃だろう。

森の中を進み丘を上った所に桜はある。

桜が見えてきたとき、強い風が吹いた。花びらが舞う。

「……美しいな……」

——そう呟いた時だった。

桜の根元が虹色に光った。光は一瞬だけで光が消えると、そこには少女が倒れていた。

（——っ！！！）

一体何が起こったのかは分からないが、倒れたまま起き上がる気配の無い少女に駆け寄る。うつ伏せになっている身体をそっと起こしてやると、少女の顔が見えた。

まるで作り物のような美しい顔に息を呑む。——が、直ぐに頭を振って冷静さを取り戻す。

「おいっおいっ！大丈夫か！？」

身体を軽く揺ると少女の眉間に皺が寄る。それを見て安心とした。

「ん……」

少女はゆっくりと目を開ける。

最初は俺の胸にあった視線が徐々に上がっていく。——そして、目が合う。

長い睫毛に縁取られた神秘的な黒い瞳が驚いたようにこちらをじっと見詰めていた。

俺もまた、何故か視線を逸らすことが出来なかった。

どれ程長い時間見詰め合っていたのか、腕の中で大人しくしていた少女が不意に動いた。

その小さい手でウィースの頬を撫で始めた。触れている部分が熱くなるのが分かる。

動けなくなる。いや、動きたくない。出来ることならずっとこのまま…。

「ルシフェル様だあ……」

少女は鈴の音のような美しい声で囁くと、長い睫に縁取られた大きな瞳から涙を一滴流した。

それを見たウィースに衝撃が走る。何故かこの少女が泣くのは堪えられないと思ったからだ。

「どっとうしたっ……どこか痛いのか？」

ウィースが少女の身体に怪我がないか確認しようと身体を離す。

——と、少女が抱き着いてきた。

（——っ！！！！！）

「私も桜の精に立候補させてくださいっ」

少女は、とてもその細い腕から出た力だとは思えないくらい力強さで俺の顔を両手でガシツとしっかり掴むと、その小さく美しい顔を近づけて来た。

彼の顔に少女の息がかかった。完全に思考が止まる。

心臓は早鐘の様にうるさく鳴っていた。少女にも聞こえそうな程に。

お互いの唇が触れ合う直前、咄嗟に少女の首に手刀を落としてしまった。

「ぐえ」

少女はまた気を失い、今度は彼の胸に倒れた。

（あっ……つい）

「すまない」と謝りながら、もう一度少女の顔を見た。どんな風に笑っただろうな。……ああ、だめだ。なんか思考がめちゃくちゃだな。

いつの間にかオレンジ色になっていた空を見上げる。

「どっしたらいいんだろうな……」

——夕日に照らされたウィースの顔は、真っ赤だった。

暫くこの謎の少女をどうするか考えていたが結局良い案が浮かば

なかったので、とりあえず実家に連れていくことにする。

（あそこだったら部屋も有るし、母さんもフロアも居るしな…大丈夫だろう）

まだ頭は混乱していたが、すっかり腕の中で少女を抱き抱え立ち上がる。

そして歩を進めようとしたとき、あることを思い出した。

（…そういえば、”ルシフェル様”って誰だ？）

初めて感じる不快な気分と共に、新たな疑問が一つ増えた。

## 桜の精と騎士（後書き）

レイス「はは〜ん、これは隊長”一目惚れ”しちゃったみたいです  
ねえ」

作者「でも本人は気付いてな……って、あれ？ レイスさんがウィ  
ースさんより先にここへ登場しちゃっていいの？」

レイス「いいんじゃないですか？ どうせ隊長、ここに来たって”  
知らん””うるさい”で通しますよ」

作者「……呼ぶの止めようかな」

## 異世界（前書き）

話を足しました。編集前の「異世界」はこの話と次話で分けた。

## 異世界

私は目を開けていられないくらい強烈な光に包まれて、身体はあつちへ行ったりこつちへ行ったりしていた。まあ、ずっと目を瞑っていたから”あつち”と”こつち”の方向は分らないけれど。

結構長い時間ふらふらとして正直飽き始めたとき、誰かに腕を掴まれた。でも、目を開けて確認することが出来ない。——この光、絶対目に悪いと思う。腕を振ってその誰かの腕を振り払おうとしたら、声が聞こえた。

『お願いです、子供のように暴れないで』

……失礼な。でも優しいその声に危険はないと感じて言われた通りに大人しくする。

『本当はこんなこととしてはいけないのです。私も彼らも。でも私は罪には問われない。そう思ったら我慢出来ませんでした』

何の話だろうか？ まったく話についていけない。彼女は私の腕を掴んだまま何処かへ進んで行きながら、尚もよく分からない告白を続けた。

『貴女には謝っても謝りきれません。でも私も、この、貴女という幸運を逃す訳にはいきません』

『ちよつと待って。貴女の言ってること、よく分からない』

私が口を挟むと彼女は言った。

『今はそれでいいんです。貴女はそのままいてくれたらそれだけで』彼女が止まると私も止まった。彼女は続ける。『……お願いがあります。どうか、どうか諦めないでください』

ダメだ、会話になって無い。相変わらず何の話かさっぱり分からないもん。ただ私は巻き込まれたらしいことだけは理解したけれど、思わず溜め息が出る。

『ごめんなさい。ちゃんと話してあげたいけれど時間が無いの。でもきつと貴女はこの世界を気に入ってくれるわ』

——この世界!?

彼女の声に突飛な発言に今の自分な立場を実感する。これ絶対おかしい事に巻き込まれてるって。

『本当にちょっと待って！ この世界ってどういう事!?!?』

『大丈夫、次に貴女が目が覚めたときに混乱しないよう、此処での記憶は今、記憶の奥深くに眠らせておきます。嗚呼もうダメッ！ さあ、行ってください!?!?』

そう言うと、彼女は力一杯私の背中を押した。

——夢を見た。

凄く良い夢。何か温かいものが触れて、ゆさゆさと揺らされ目を開ければ、桜の木をバックに従えた孤独の騎士ルシフェル様がいた。最初は驚きでいっぱいだったけれど、その麗しい顔を見つめていればじわじわと嬉しさが込み上げてくる。しかも顔が近い。——嗚

呼幸せ。

ルシフェル様に出逢って早三年、毎晩欠かさず枕の下に小説を入れ、”夢に出て来て下さい”と願い続けた甲斐があったというものだ。

（綺麗な顔……）

うつとり見つめているだけじゃ物足りなくて、手を伸ばして触れてみた。

（……幸せ……）

幸せ過ぎて胸がキュンと締め付けられる。

「ルシフェル様だあ……」

もう分かっていたけれど、言わずにはいらなかった。言葉にすれば更に実感できるような気がしたから。

……なんて良い夢なんだろう。涙が出てくる。

あつ慌ててる。泣いたせいだろうな。なんか可愛いー。でもいなり桜の精はいつもこうやってルシフェル様に愛されてるんだもんね……って思いだしたああああああ……！！！！

つついルシフェル様に夢中になって忘れるところだった。

”ルシフェル様に会ったらしたい事（いや、必ずするけどね）BEST3”……を！

私としたことが。危ない危ない。目が覚める前に気づいてよかつ

たー。

ということでは早速。

（やっぱりまずは私も――）

「私も桜の精に立候補させてくださいっ」

これ重要！

（立候補のつぎは――）

ルシフェル様の顔を掴む。力を入れ過ぎた気もするけど、まあいいや。夢だし。

顔を近づけた。ルシフェル様の息がかかる。ふふ。

（良い香り）

口臭まで素晴らしいなんてさすがルシフェル様。そんなことを思いながら更に顔を近づけた。

――トン。

首に何か強い衝撃が当たったと思ったら、急速に意識が遠のく。恋する乙女が好きな人の前で絶対に出したくないような変な声が出た。

（くっここまでか……っ！ 無念！）

私は意識を手放した――

だんだんと覚醒していく意識の中で、私は今し方見ていた夢を思い出していた。

（……やっと、やっと会えた。ルシフェル様ったら中々会いに来てくれないんだもの……。——照れ屋さんなんだから……）

寝返りをうつと、布団がはだけて夜の冷えた空気に背中があたった。

（うわ寒いつ）

もぞもぞと腕を動かして布団を掴んで引っ張りあげようとした。でも違和感を感じて手を止める。

生まれてこのかたサラサラフワフワな高級羽毛布団しか使ったことが無いのに、何故かこの布団はざらざらする。とにかく今まで出会ったことのないタイプの肌触りをしている布団で寝ていることに驚いて、起き上った。

——そこは見知らぬ部屋だった。

異世界（後書き）

作者「編集疲れたー」  
美鈴「作者が悪い」

## 異世界2（前書き）

「異世界」の続きです。編集前とそんなに変わりません。

## 異世界2

私は見知らぬ部屋にいた。というか寝ていた。

「えっ……ここ何処？」

もしかして誘拐された……？ もしそうなら悠長に寝ている暇は無い。

不安になって辺りを見渡すと木の窓が目に入った。

（落ち着くのよ。まずは状況確認しなきゃ）

そろそろとベットを降りて窓まで音をたてないように近づくと、金属の留め金を外した。

ゆっくり窓を開けて、外を覗く。

絶句。

——月が二つある……。

青白い満月が二つ。その下には月光に照らされた小さな町——明らかに日本ではないし現代でもない——があつた。そして、町よりもちよつと遠くにある巨大な建物。

（な、なにあれ……お城？）

子供の頃に行った旅行先で似たような建物を見たことがある。  
月が二つもあるおかげで、月明かりだけで思ったよりもよく見え  
た。——全く嬉しく無いけれど。

一旦窓を閉めることにした。背中を尋常じゃない量の冷や汗が流  
れ落ちているのが分かる。

深呼吸をしてから勇気を出してもう一度窓を開ける。

（私はタヌキに化かされてるだけ。私はタヌキに化かされてるだけ）

——希望の呪文に効果は無かった。窓を閉めずにベットに戻る。  
もう窓には用は無い。

（ま、まあ誘拐じゃないことだけは確かね。いくら誘拐することに  
長けてる人でもこんな異世界になんて……）

「冗談でしょ……」。

「……異世界……」

自然と口から出ていた。頭の中で今まで読んだ沢山の小説がピツ  
クアップされていく。

月が二つの異世界……読んだことある。……中世ヨーロッパの様  
な町並み……これも読んだことある。ていうか大体そうよね。……

お城……王道すぎる。でも私、事故にあったわけでもないしどうやって……。

——あっ！——！！

そこで自分の部屋に居たときのことを思い出した。

天井から降ってきた桜の花びら、窓は開いてなかったのに吹いた風、突然の虹色の光。

それに今いる——月が二つもある——知らないこの世界。

頭の中で、仮定が確定に変わっていくためのパズルのピースが一つ一つ、着実に、はめられていく。

開けっぱなしの窓に視線を向けた。

「ここは……異世界なのね……」

不思議と悲しくはなかった。

ただ、今まで生んで育ててくれた両親の顔を思い出すと、そんな自分にすごく罪悪感を感じた。

（お母さん、お父さん、みんな……ごめんなさい）

それでもこの解放感を否定しようとは思わなかった。

それよりも美鈴には考えなければいけないことがある。

これからどうやって生きていくのか。私はどうしてここにいるのか不思議と悲しくはならない。ただ、今まで生んで育ててくれた両親の顔を思い出すと、そんな自分にすごく罪悪感を感じた。

それでもこの解放感を否定しようとは思わなかった。

それよりも美鈴には考えなければいけないことがある。

これからどうやって生きていくのか。私はどうして此処にいるのか――

## 異世界2（後書き）

作者「あー疲れた。今年前三時だよ。こんな時間まで起きてるの久しぶり。中学生に戻った気分」  
美鈴「へえー中学生？」

## 詳細（前書き）

作者「ふう……ギリギリ”今週中に次話投稿する”約束を守れました！よかったあ」

## 詳細

『これからどうやって生きていくのか。私はどうしてここにいるのか――』

私は窓のそばに木の椅子を持って行つて座り、窓枠に腕を着いて考えていた。

ここが異世界だということが確定した今、ちゃんと考えないといけない事がある。

まず、”これからどうやって生きていくか”。

この世界の常識は何も分からないけど、生きていくためにはそれでもお金は必要だろうし、お金が無かったら食べ物を買うことも住む所を借りることも出来ない。となれば、お金を稼ぐために仕事を探さなきゃならない。――でも仕事をするのに戸籍が必要だったら？

（うーん……とりあえずは情報収集から、かな）

そしてもう一つ。”私はどうしてここにいるのか”。

起きた瞬間からいろんなことがあつて、気づいてたけど後回しにしてたことがあつた。

「この……パジャマ？でいいのかな。可愛い」

美鈴は召還されたときピンク色のパジャマを着ていたのに、今着ているのは白いワンピース。膝丈で肩紐はリボン結びにされている。胸の部分に茶色のボタンが三つ付いたシンプルな物だった。

そこで自分の右手を見る。中指の付け根の所によく見ないと分か

らない位の小さなホクロがあった。私の身体だという印だ。これで魂が交換、私が誰かの身体を借りている、ということではないだろう。この二つが分かれば私はベットのの中にトリップして来たわけじゃないことになる。

（何処にトリップしたにせよ誰か——たぶんこの家の人——が私を保護してくれて、こうして服も着替えさせてくれたんだよね）

正体不明の少女を保護してくれた優しい人思つて美鈴は心が暖かくなった。そう簡単に出来ることじゃないからだ。

もし私の家の敷地で正体不明の少女を見つけたら、きっと家の人達は警察を呼ぶかボディガードに追い出させると思う。とりあえず家の中に入れてあげましょう、なんていう展開にはならない。

（ここの家の人達ならこの世界のこと、教えてくれるかな……）

そのあと暫く考え事をしたりぼーっとしていた私は、空がだんだんと明るくなっていることに気づくと、もうすぐ会うことになるであろうこの世界の人たちが異世界人に寛大であることを祈った。  
——ついでに美形に囲まれる王道路線から外れないようにも（力強く）祈った美鈴だった。

+ + +

（昨夜はえらい目にあつたな……）

早朝、ウィースは着替えながら、昨夜少女を実家に連れて行った

ときのことを思い出していた――

実家に着いて扉を開けた瞬間、父（で妻命の辺境騎士団大隊長）が剣を投げてきた。

「バッカモーーン！！ 花びら採ってくるのに時間掛かり過ぎだろугがぁ！ ハニーが可愛くぷりぷり怒ってんじゃねえか――ってアレ？ この可憐なお嬢さんは？」

ウィースは投げられた剣を華麗に避けてから、事の詳細を話すために家に入った。

「父さん、話があ

「わ~~~~！ ハ、ハニー！！ 大変だよ！ うちの至ってまともだと思っていた息子が少女を誘拐してきたぁー！！」

「違います！ 何故そうなるんですか！」

「……違うの？ よかった。……で、話って？」

「はぁ……。先程私が

再び話をしようとする、扉の開く音と共にまた邪魔が入った。その――黙っていれば――お姫様のような人はけだるそうな声で夫を睨むと言つ。

「ダーリン、うるさいわよ。それ以上馬鹿なこと言っていると木に吊してやるから」

「素晴らしいアイデアだね、さすがハニー」

母さんは恍惚の表情の父さんをいつものように無視してこちらを見た。

母さんは、私が抱っこしているまだあどけない美少女を見つけると、”驚愕！”という表情をしながら目を見開き手を頬に当てて叫んだ。

「ウィーちゃん！！ ママは貴方をそんな人間に育てた覚えはありません！ 今すぐそのお嬢さんを丁重にお返しなさいっ！！」

「……母さんですか。……それとウィーちゃんと呼ぶのは止めてください」

両親は何故いつも、まず人の話を聞くをいうことをしないのだろうか。——今更か。

「ハニー、誘拐して来たわけではないようだよ。——それと18分前に会ったときよりもさらに美しく成ってるね」

「気色悪い。ダーリンは黙ってて」

「ハイッ！」

元気良く返事をしてから口に手を当てて、”誓って一言も喋りません！”アピールを母さんに必至でやる父さんに、何とも言えない気持ちになりながらも、部屋を移して話を始めることにした。

すべてを話終えると母さんは難しい顔をして考え事をしていた。  
(父さんはまだアピール中)

「——母さん、そこでお願ひがあります。彼女を此処に置いて貰えませんか。私の家に連れていくわけにはいきませんから」

そこまで話して、ずっと少女に向けていた視線を母に向けると、母さんは——何かを探るように——じーっとウィースの瞳を見詰めてからにつこりと嬉しそうに笑った。

「ええ、もちろんよ。全て母さんに任せなさい！ フロンっフロ〜ン」

早速準備をするため部屋から出ていく母さんに安心して、ずっと抱っこしていた少女をソファにそっと寝かせ頭を撫でる。  
それを見ていた父さんはアピールタイムを一時休止して話かけてきた。

「……我が息子ながらお前もまた、苦労しそつだな」

「？ ……何の事ですか？」

「気にするな」とニヤニヤしている父さんに眉を顰める——まあそれも、母さんがフロンと一緒に戻って来たら瞬時にアピールタイムに戻って終わったが。

それから一時間程、任務の報告をして(レイスはウィースを待たずにさっさと帰っていた)、少女を部屋まで運び、桜の花びらを採り忘れたことを謝ったりして過ごし、最後に「明日また来る」と伝えて実家を後にした——

制服に着替え終わると、鏡の前に立った。鏡に写る自分の顔を見ていると少女の神秘的な黒い瞳を思い出す。

（あの少女はまだ眠っているだろうか）

もう一度自分の顔を――特に瞳を――見て、いつものように溜息を吐くと眼帯を着けた。

「――そろそろ行くか」

ウィースは約束通り実家に向かった。謎の少女に会うために。

## 詳細（後書き）

シャロン「フッフ、なんだか面白くなってきたわ」

カッセル（紙に何やら書いたのをシャロンに見せる）”もう喋って

もいいかい？マイチヨコレート”

シャロン（チラッと見て無視）

作者「……カッセルさんめんどくさい」

## 逆ブロポーズ

すっかり空も明るくなった頃、私は窓辺から町を眺めていた。この家がちよつと高い場所に建てられていること、部屋が二階にあるために町の眺めが良く見えた。

桶を持った女性、騎士、騎士の後をついて行く少年、お店の準備をしている人。まだまだ人は少ないけれど、町が少しずつ活動し始めたことが分かる。

暫く眺めていると、この家からブロンドのショートに黒いのワンピースを着た女の人が出てきた。

（わぁー美人さんだ。おお、なんか歩き方が優雅だ。あつ水汲んでる）

——美鈴が彼女の一挙一動に注目しているとき、視界の外では一人の青年が家の中に入ったところだった。

（というか、そろそろだよな。言葉通じるといいな）

外の景色からドアに視線を移した。

のん気に構えていると数人の足音がしてこの部屋の前で止まる。そしてヒソヒソと話し声が聞こえてきた。

「ねえフロン。彼女、まだ寝てるかしら？」

「さあどうでしょう？」

「ふふ、なんだかドキドキするわね」

「そうでございますね、奥様」

「彼女、どんな子だと思う？」

「まだ何とも言えませんね。かなりの美人であることしか分かりません」

「美少女なことは確かね。変わった顔立ちだけど、すごく綺麗だわ。胸も大きいし私が男だったら惚れてるわ。揉みたくなるというか」

「同感です、奥様」

最初は潜めていた声も最後の方はもろに聞こえていたので、何とも言えない気持ちになった。

早く入って来てくれないかな、と思っているともう一人——カチヤカチヤと聞きなれない音と共に——やって来た。

「——母さん達、そこで立ったまま何をしているんですか？」

その声を聞いて思わず固まる——どこかで、しかもごく最近聞いた様な気がするこの魅力的な声。

高鳴る心臓を無視して必死に思い出そうとする。

（——っ あ！）美鈴が思い出した瞬間、ノックの音がして「入るぞ」という声と共に扉が開いた。

そこにいる人を見て目を見開く——こんなことがあって良いんだ  
ろうか。

「……ルシフェル様……」

私の口から出てきた声は誰も聞き取れないくらい小さかった。嬉  
しさのあまり身体が震える。

夢だと思っていたのに……。

（夢じゃなかったんだ……）

私は立ち上がり、愛しの彼のもとまで必要な五歩を進んだ。ルシ  
フェル様は近づいていく私をじっと見つめたまま動かない。

ルシフェル様の目の前に来ると止まり、私もまた相手の瞳を見つ  
める。

——そして、大きな声で言った。

「私と結婚してください！……！」

## 逆プロポーズ（後書き）

作者「やっとここまで来ました！ 美鈴ちゃん頑張れ！」  
美鈴「もちろん。絶対逃がさないよ」

押して押してさらに押す（前書き）

お待たせしましたー！

押して押してさらに押す

——私と結婚してください!!!

目の前の美しい少女は俺を見つめている。今、その少女の口から「結婚してくれ」と言われた気がするが、きっと聞き間違いだろう。そうに違いない。

「なんだって？」

思わず聞き返した。

止めておいた方がよいぞ！ 逃げるなら今だ！ と、心の何処かで何故か身の危険を感じて必死に止める自分がいたが、此処で逃げるのはおかしいし第一、今、此処にいるのはこの謎の少女と話をするためだ。逃げては意味がない。

少女はその黒曜石のような大きな瞳に、先程よりも強い意志を宿して答えた。

「私と結婚してほしいんです。必ず幸せにします。どんな野蛮で凶暴な敵からだって守ります」

一体何故、突然こんなことを言い始めたんだ？ 全く理解できん。右手は額に当てて、左手は少女の肩に置いた。……細い。

「大丈夫か？ 何か混乱してるみたいだな。もうちょっと休んだ方がいい」

「お気遣い感謝します。でも大丈夫です。——それで、返事を聞かせてもらえますか？」

少女は更に一步こちらに近づいた。真剣な眼差しに額に変な汗が伝う。

「待て。何故急にそんなことを言うんだ？ 昨日出会ったばかりだろっ？」

「誰かを好きになるのに時間は関係ありません。それに私――」

そう言つと少女は花のように微笑う。心臓がうるさいく鳴る。

「――ルシフェル様のことを愛してます」

瞬時に気分が下がった。何度となくこの少女の口から聞いた”ルシフェル様”という名前。

明らかに俺とその”ルシフェル様”を勘違いしている。

「俺は君が愛しているという”ルシフェル様”ではない」

肩から手を離す。無性に苛々して口調が強く冷たくなってしまった。

「えっ……」

「俺の名はウィース・ハーンズだ」

俺が名乗ると少女は驚きでいっぱいな顔になった。

「貴方は……ルシフェル様……じゃ……ない……？」

「ああ。期待に添えることが出来なくて悪いが」

「……此処はアストール王国ですよネ？」

「アストールという国は無い。この国はサントレア王国で、此処はサンスウッドという辺境の町だ」

暫くの間の後、「そう、ですよネ」と言つと残念そうな顔になつた。その顔を見てると自分も非常に残念な気持ちになつてくる。何故俺はルシフェルという男じゃなくて、この国はアストールという国じゃないのか。

どうすることも出来ない事実に打ちひしがれていると、ふと少女は一瞬何か考えた後にハツとした。何か良いことでも閃いたのだろうか。

「どうかしたのか？」

「私の名前は別宮 美鈴です。あつてもこつち風だと」美鈴 別宮かな。美鈴つて呼んでください、ウィースさん」

微笑みながら言う。そういえば少女の名前を聞いていなかった。

「ああ、分かった。ミスズだな」

「はい。——ところで、ウィースさんは結婚されているのですか？ 恋人は？」

どうして今それが知りたいのかは分からないが、とりあえず答えた。

「独身だ。そういう相手もない」

それを聞くとミスズは怖いくらいにんまりと笑った。

「じゃあ問題ありませんね」

「……なんのことだ」

身体に震えが走る。先程よりも更に身の危険を感じるのは何故だろうか。

「私と結婚しましょう!」

「……待て。ミスズが結婚したいのはルシフェル様という男だろう」

「ええ、でも気が変わりました」

「……こんな短時間で心変わりするのは酷くないか。相手が可哀想だ。」

「私、思っただです。貴方がルシフェル様じゃないのは残念だけど、よく考えたら彼には桜の精がいますしね。私が何度桜の精に立候補しようという意味がないんです。第一彼は架空の人ですから。」

それだったら目の前の（ルシフェル様そっくりの）ウィースさんと結婚したいです」

「……架空の人物と結婚しようとしてたのか」

「でも現実になりそうです。ウィースさんと結婚すれば」

「俺を身代わりにする気が。言っておくが俺は結婚する気は無い。誰ともな」

「ルシフェル様を好きだったのは、彼が私の好みそのものだったからです。そしてウィースさんはルシフェル様にそっくりです。しかも三次元の人……！ 現実に理想の人がいるならその人の方が良いです。」

ね、結婚しましょう」

ミスズはこちらが息をするのを忘れるくらいの美しく微笑むと、いきなり抱きついてきた。

「なっ！！！」

慌てて身体を離そうとすると、ミスズは背伸びをして白く細い腕を首に絡めてきた。ミスズの息が耳にかかる。

そして一言。

「——逃がしませんよ」

耳たぶを舐められた。

押して押してさらに押す（後書き）

作者「いけいけ、そのまま押し倒せ！」

美鈴「ふふふ」

ウィース「おいつ余計なことを言っな！」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1859r/>

---

恋する変態

2011年6月18日22時23分発行